

特集2

“ノリ”ってなに？

よく「キミの演奏は“ノリ”がいい」「このバンドはスイングらしい“ノリ”が出ていない」など言われますが、では、この“ノリ”とはいったいどのようなものなのでしょうか？ ジャズ・ポップス系のナンバーをノリノリで演奏するヒントを、各界のプロがこっそり教えます。

BIG2 対談



真島俊夫

天野正道

“ノリ”の正体とは？

ききて=留分敦(編集部)

「暑いなあありがとうございます。演奏で、よく「ノッてるね」とか「ノリがいい、悪い」などと言いますよね。何となくわかるんですけども、じゃ、つきつめるとそれは何なのでしょう？」

それと、吹奏楽には定番の「ポップスステージ」があるように、ひんばんに演奏されますが、いい感じで演奏できているバンドばかりかと言えそうでなくても、ちょっとキレが悪いな、モタっているな、ヤボったいなと感じるものも多い。

ということで、編集部では「ノリ」というものは、いったい何だ？「ノリ」をよくするためにはどうしたらいいのか」という企画を考えてみました。今回、ノリの裏も表もご存じのおふたりに、ノリについて縦横に語っていただきたいと思ひ、本日の席を設けました。よろしくお願ひします。

天野 確かに一言で言えないんですけどね、ノリって。

真島 吹奏楽をやっている人たちは、最初は楽譜から入ると思いますが、楽譜というのは文章で言えば活字なんです。ここで人が文章を音読した場合を考えてください。たぶん、各人それぞれのタイミングで読むと思うんですが、どういふふうに音読するかは文章には書いていませんね。楽譜もたぶんそういうものだと思います。

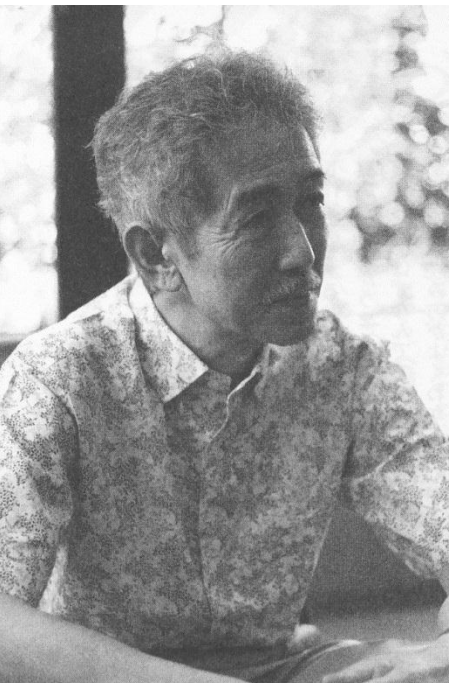
それでも、とりあえず伝えるために楽譜というものが進化してきたわけですが、結局ノリの面は非常に書き表わしにくいというか……。

天野 西洋音楽の楽譜では書ききれないですよ。でも、「棒読み」じゃいけないのは楽譜も同じ。

真島 だから、「どうやってノリをマスターするか」って聞かれたら、いきなり結論を言っちゃうようだけど、実際の曲をいろいろ聴くよりしようがないと思うんです。

たとえば、活字で大阪弁が書いてあったとして、ぼくらが読んでも絶対大阪弁にならない。大阪の人が話すのを聴いて初めて「あ、大阪弁というのはこういうものなんだ」と知る。同

特集2 “ノリ”ってなに?



Profile
真島俊夫 (ましまとしお)
もうひとつのプロフィール

1949年生まれ。神奈川県在学中からナイトクラブのビッグバンドでトロンボーンを吹く。69年「ヤマハ・バンドディレクター・コース」に入学、兼田敏氏に師事。翌年からトロンボーンとピアノで多くのバンドを渡り歩く。在籍した主要バンドは、ダイキシー・ジャズ、リッキーと960ポンド、クレストフォー・シンガーズ、「チェリッシュ」のバックバンド、等々。81年、岩井直博氏のアシスタントを始め、この頃から作・編曲の仕事の比重が大きくなる。2002年ごろ、バンド活動から引退。

というのがジャズの譜法なんですね。
天野 いちいち三連で書いたらたいへんですからね。もう読めないです、複雑になっちゃって。——グルーブというの、よく聞く言葉です。

天野 グルーブというのは、日本語に直すときつきよくノリのことですから。で、そこに「揺れ」も入ってくる。

真島 4つ刻んでいる人、あるいは8つ刻んでいる人、いろいろいるわけで、それがまじり合ったときに生まれるいいノリを、グルーブと言ったと思うんですけどね。

天野 だから打ち込みでなくてもかんでも縦線ジャズにやっちゃったら、絶対グルーブは出ないわけですよ。

真島 うん。最近のJポップなんかを聴いていると、ノリがないと感ずるのは、リズムが均等だからなんです。ただチャカチャカチャカチャカっていつてただけで。そういう流行なのかな。

天野 それは手を抜いているんですよ。われわれはそれこそ音符一つごとに、細かく音価のデータを覚えて打ち込みをやっていたわけですが、今はみんなやらないわけ。だからあんなにちゃやう。

真島 でも、刻んでいる人は正確にやろうとしたほうがいいです。ただし正確にやっているつもりでも、人間だから多少は……。

天野 ちょっと揺れるんだけどね。
——リズムを刻んでいるほうに関しては、基

本的にはブレイクするところ以外はテンポ・ルバートはないんですよ？

真島 うん、揺れはあるんです。特に、ジャズは走っていく音楽なんです。それがロック系が主体になってきてから、リズムがわりに正確になっている。だからロックドラマーがジャズをやると、なんとなくおもしろくない。逆にジャズドラマーが16ビートとかをやると、みんな走るの。

天野 そう、走ってね、おもしろいんですよ(笑)。こんなふうにはプロのプレーヤーでもそれぞれ専門があつて、実は全部うまい人というのはなかなかいないんです。

■今の若い人って、あんまり「耳」がやっていないと思うんですよね

——ジャンルによってかなり違うという。その話、もうちょっと詳しくいきましょう。
天野さんは、テレビの仕事、あるいはCM、劇伴、映画とやっていたら、いろいろなジャンルの曲を頼まれて作曲したことがあると思うんですけども、ジャンルによって求められるノリが違うという点で、経験した実例をお願いします。

天野 そうですね、8ビートでもいわゆる「前ノリ」と「後ノリ」があるわけです。それは何かというと、たとえば2、4拍にスネアが入ります。

る、よくあるパターンでも、ベースラインがドーンストドーンストといったときとドドバードパーで、実はノリが違うんですよ(注2)。あるいは、いわゆるヘビメタではスネアが後ろですが、同じヘビメタでもアップテンポのときは少し前に行つてくれたほうが気持ちいい、とかがあるわけです。

こんな感じで、基本ビートは一緒でも、微妙に後ろにのけぞって進む音楽と、前へと進む音楽に分かれます。ジャズの場合はだいたいちよつと前で、テンポも上がってきますよね。

真島 クラシックのソリストの場合、彼らはコンチエルトなんかでは自分が引つ張っていきますよね。だからだいたい先に行つてしまふけど、ジャズ系の曲のソロをやる場合は、そうやっちゃやうと居心地が悪いんです。ジャズは後ろにノッたほうがいい場合が多いから。

たとえば「ミスティ」というスタンダードナンバーを作曲したエロール・ガーナーというピアニストがいますが、彼のピアノのスタイルは、4ビートを左手で刻むんです。で、メロディ、右手のアドリブがすぐ後ろにきている。

天野 分裂症ね、テンポ的には。でも、それを聴いてると、思わず「イェーイ！」って喝采の声が出ちゃう。

真島 カウント・ベイシーもそうですね。サックスでもトランペットでも、ソリをやっているときに後ろに引つ張つたりしている。ウバダバダバダバ、ウッパ—ヤツ(注3)なんてやってきた場合、このウッ「パ」は音価が伸びているんですよ。で、ウバダバダバと、フレーズの最後できつちり伸びた分が戻るんです。それを全員で一丸となつてやるところがすごいんだけど、合わせるんでしょやうね、あれは。

天野 彼らはそういうビート感とかノリを持っているから、自然になつちやうのかもしれないよな。日本人はそれがないから、なかなか合わないんだらうし。

真島 ほかの例で言うと、たとえばアメリカの黒人は全部ジャズが吹けるかと思つたら、違つたんですよ。

——それ、日本人だったら、全員空手の有段者と思われているみたいなものですね。

真島 以前、ほとんどのところにアメリカの学生が来て、黒人でトランペットを吹くというのですよ。それなら一緒にジャズをやろうということになつて。きつとうまいんだらうと思つたら、ベッペベッペとどいどい音色でリズムもデレデレ、しばらくかたずをのんで聴いていたんだけど、これ、やっぱり下手だよな(笑)。

ジャズは勉強するものなんです。空手もそうだけど、日本人がいきなり日本語を歌えるかといつたらそうじゃないのと同じで、やっぱりこれは学習するものなんだな。

注2

ドーン ストドーン スト
ド ド パー ド ド パー

注3

Fast

ウバダバダバダバ ウッパ—ヤツ ウバダバダバ

——思うんですが、耳コピというのは赤ん坊が母親のしゃべる言葉を聞いて覚えるようなもので、耳コピしないと本来何も始まらないんじゃないでしょうか。

天野 コピーする苦勞はあるけど、楽譜に書

けないことまで、みんな耳でわかるわけですよ。初めに話した、「大阪弁は文章だけ見てもわからない、話し方を聞かない」というのと同じです。あと、落語を師匠から習うときも同様です。「耳で聴いて、それをコピーして、自分で出して、確認して」ということの繰り返し作業でもあるわけでしょう、すべて。

真島 それがうまくいき出すと、やっていて気持ちいいはずなんですよ。でも、譜面からノリを出す読み方がよくわからずにやっている、本人も何となく落ちつかないはずなんですよ。決まらないというか、小骨がのどにひっかかったように。

天野 何か煮え切れない感じの、もやもやしものが残る。

誰が演奏しているか、聴くとわかるよ

真島 それとベースとドラムの役割をわかっていない人がいますね。指揮者に合わせちゃうの。自分たちがリズムをつくり出しているんだという意識がなく、揺れてはいけないときに揺れたりする。まだある。ベースストがよく1本指でピチカートしてたりするんだよね。

天野 ビートをはっきり出すために、2本指(人差し指と中指をそろえて弾く)でやらないと。

真島 ジャズとかポップス関係は必ず2本です。それからベースはハーモニーの最低音を出しているのと同時に、ベースでリズムを出しているんだという意識がないと、もうだめですね。

天野 「楽だから」という理由でエレキベースを使うと、ますますひどくなる。そのあたりを知らずにエレベを弾いている人の4ビートは、もう聴いていられないです。

あと、ベースラインの音が短い人が多いじゃないですか。4ビートなのに、ドゥーンドゥーンドゥーンドゥーンと弾いてくれない、ベッベッベッベッと切れてしまう。さっきの管ののびすぎとは逆です。

真島 ジャズの歴史の話になりますが、初期

のバス担当は、「デキシランドジャズのようにスリーフオンとか、ああいう管楽器だったんで、ブンツ、ブンツ、ボンツ、ボンツって感じで、やっぱり少し短いです。マーチから発展しているようなところがありますから、縦ノリなんですよ。

で、時代が下ると屋外から室内で演奏するようになったり、ウッドベースに変わって、そうすると音が伸びるようになって、ブーンブーンブーンとなっていく。

さらに、モダンジャズの初期のころからシンバルレガートという奏法が発明されて、シーンチック、シーンチック(注4)って音が伸びますよね。それとベースが相まって、初めてジャズの三連のノリが出てきます。そうすると、ノリがちよっと今風になってくるわけですよ。横にノれるという意味。

天野 そうそう、縦ノリじゃなく横ノリになってくるわけですよ。

真島 こんなふうに、クラシックが200年かけて進歩したことを、ジャズは100年かそこらでえらく速く進んだんです。

あと、白人の8ビートはツクチャンツクチャンという単純なもので、あれは縦ノリに近いんですよ。これが黒人がやると、チュクチュクチュクチュクというふうに揺れている印象になる。**天野** いわゆる「ロイク」のノリというやつですな(注5)。

真島 ツカツクツカツク……という形で(横に揺れて)だんだん気持ちよくなってくる。だから聴くとわかるんですよ、これは黒人の演奏家だな、白人だなという。

天野 ファンクナンバーなんて、もろわかるからね。それと、ウエストコーストの白人の16ビートのギターノリですが、「ホテル・カリフォルニア」以降あたりからのビート感、逆に黒人には出せないと言っている。

小節の頭がわからない??

真島 クラシックはクラシックのよさがあるん

ですが、聴衆から声はあんまり出ないですよ。「ブラボー」は出るけど。でも、いいノリのジャズ、ポップスの場合は、思わず「イエーイー」と反応してしまう。そこがやっぱりすごいですね。何だろいうな、あれは。

天野 歌舞伎と同じです。

真島 体が喜ぶところがあるんですよ。西洋音楽は感性と頭で発展したという気がするんですが、ジャズとかポップスのほうは感性に加えて肉体的な部分がすごく強いかなとは思っています。

天野 聴いている人が自然に体が動くというやつ。

真島 ということは、「音楽の3要素」と言われているうちの1つ、リズムの部分は強力だと思えます。リズムに関しては、ジャズとか、ラテンとかのほうがクラシックより100年進んでいるんじゃないかと。

去年、「GOLD POP」の録音でニューヨークに行ったんですが、そのときに「バードランド」という有名なジャズクラブへ立ち寄ったところ、ちょうどボサノバナイトだったんです。演奏が始まったんだけど、まずドラムからして小節の1拍めの頭でバスドラを踏まないのね。ベースも頭を打たないし、ふつうの刻みじゃなくてポリフォニーみたいのをやっている。そういうしているうちにボーカルも始まっちゃうし、16小節ぐらいそのままですよ。「これ、全員がずれてない?」って感じだったんですが、17小節目ぐらいいたら、「あ、ここが小節の頭だったんだ」と、やっとわかったぐらい。すごいなと思ってる。誰も小節の頭をやらないの。

天野 サルササだつて頭がないのがあるじゃないですか。

真島 日本人は最初に来た音を小節の頭だと感じる傾向があるようですが、向こうへ行ったら日本人がパーカッションで参加すると、曲の初めから入れないと言っていました。

最初のカウントでも、日本みたいにワンツー、ワンツースリーフォーって言わないんですよ。代わりにクラベスカ何かで、ンカッカツ、カッカツカツとやるっていうんです。そのカッ

カッカツを聴いた瞬間に、「ドーンってみんな入ってくるんだけど、ずれてしまう。結局2小節目ぐらいついてから入ることにしたって。

——ただ、だまし絵みたいな構図というのはクラシックの譜面でもよくありますよ。

天野 確かにありますよ。いわゆる弱起というのもあるし、間に入るやつもあるんですけど。

真島 ぼくは、サン・サイエンスの交響曲第3番の第2部の頭は、ダカダカダン、ダカダカダンと思っていたの。あれ、弱起で、正しくはンダカダカダンでしょう。

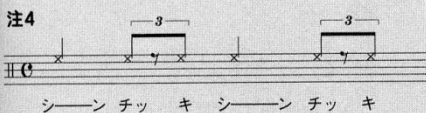
天野 《テイル》のホルンもそう、スツパツパツパーラ。あれも同じように聴こえますよ。

真島 バッハですらそうだもんね。管弦楽組曲第2番(パディネリ)のタツタカタツタカ……、あれも弱起。そうしないと最後につじつま合わなくなるんですけど、誰の聴いても、最初は頭からやっているように聞こえる。

天野 いっぱいありますよ。

真島 僕は日本人だからわからないんですよ。音だけを聴いているとどうもおかしい、ここで変拍子が入っているのかな。でも楽譜を見るとそうではない。

天野 歌曲の場合はアウフタクトに必ず前置詞がつくとかがあるから、向こうの人はすぐわかっていられるんですけど、日本人はそういう感覚がないからわからなくなっちゃうんですよ。



注5
ミュージシャンの間で話される言葉(=楽隊用語)の特徴は、言葉をひっくり返すこと。たとえばベースなら「スーベ」となるが、あまり法則らしいものはなく、ジャズ=ズージャ、トロンボーン=ボントロ、ピアノ=ヤノビなどとなる。「ノビア」などとうっかり言うのと恥ずかしいことになるので気をつけよう。音楽用語以外にもいろいろあって、演奏旅行=ピータ、タクシー=シータクなどはよく使われるが、人名にも適用されていて、本名森田一義=タモリなどは有名である。

“ノリ”ってなに？

ね。
真島 だから結局、聴いてそれを覚えるのと、譜面をその後で見る。クラシックの場合はだいぶ譜面に近いですからね。それで確認したいくよりしようがないんでしょうね。身近な例でいうと《Happy Birthday to You》、あれを頭から音符があると思っている人がいるからね。
天野 ああ、そうそう、「ハッピー」バースデー トゥーユーと。
真島 あれもほとんどは弱起なんですよ。でも2拍子で歌っている人がいる……。
天野 ああ、ハッピーバース/デートゥー/ユー、難しい。
真島 どっかで合うんだけどね。じゃ、3小節単位か。
天野 それはともかく、「バースデー」にポイントがくるから弱起なわけですね、あれは。
真島 そうそう。だから、そこでビートがつくわけですよ。
天野 そういのがたくさんある。で、ポップスの場合ももっと顕著なのが多いわけだし。
■ラテン音楽には2系統がある

るとか。
天野 そうそう、つじつまがあっていないことがある。
真島 そうすると、やっぱり変なんですよ。
天野 ノリがそこで変わっちゃうわけですよ。ね。
 ——現場の指導者へのアドバイスはありますか？
天野 サンバをやっているのに、コンガやボンゴをマレットでタカカタカカタカカタカ……と、16ビートで必死に一本調子で叩いているのをしげしげ見ますが、「それは違うでしょう」とてのがあります。
真島 これは「その曲のスタイルを尊重すること」につながる話なんです、サンバではコンガは絶対使わないんです。
天野 入らないんですよ。
真島 何でも入れちゃえばいいというものではない、そのへんはまず勉強してほしいです。そんな難しいことじゃないんで。
 ラテン音楽は大きく分けて、キューバのラテンとブラジルのラテンがあります。楽器も双方で使い分けるといことですね。
 ——キューバのほうはルンバ……。
真島 ルンバ、チャチャチャ、マンボ。あとサルサもキューバ系のリズムが発展したものです。
天野 ブラジルならサンバ、ボサノバ。あとはバイアアとかシヨロ口もある。でもあつちにはコンガは入らないんですよ。
真島 似た楽器はありますけどね、あの叩き方はしないんですよ。
天野 そういところコンガが入っていると違和感を感じるんですよ。
真島 そもそもサンバにコンガのパターンがないんですよ。

■ノリがいい状態になった場合は、自分たちも気持ちいいはずなんです

天野 とにかく、アフタービートを感じることに一番大きいと思うんですよ。だからバロックと同じですよ。バロックも裏拍を感じていないとできない音楽だから、そのあたりがたぶん現場に知られていないと思うんですよ。
 ——じゃ、どうしたらいいか。とにかく聴くこと。
天野 そう、結論はやっぱりそれなだけで、それはともかく、アフタービート。このところがもうちよつとわかればノリが変わってくると思うんですけど。
真島 たとえば1人でメトロノームを使って練習する場合ですけど、カッカッカッカッと鳴りますね。これを裏に感じるようにするの。ワン・ツー・ワンツースリーフォー、ンタンタンタンタ、1234、1234、1234(注7)とやってみる、これだけでずいぶんノリが変わる。これが1234、1234とやるのでは違うでしょうか？ この練習は、木のメトロノームのほうがいいんですけどね。
天野 そうそう。音質もそうだし、棒が左右に揺れるからアフタービートがわかりやすいんですよ。
 ——さて、そろそろ締めめの言葉をお願いします。
天野 ビートにはまって、ソロがはまったときの気持ちよさ、対して、はまらないときの心地悪さということ。これに尽きるのかなと思うんですよ。
真島 うん。いい状態になった場合は、自分たちも気持ちいいはずなんですよ。逆に何か腑に落ちないという場合は、だいたいどこかが間違っていると思ってい。
天野 はまっていけないんですよ。グルーブしてない、ノリが悪いということでしょうね。
真島 何度もここに戻りますけど、やっぱり聴くしかないんですよ。
天野 ええ、ほんと、そうですね。何も聴いたことない人は、そのノリは絶対出せないと思うんですよ。
真島 そうそう。そうなんですよ。聴いて勉強すればニューアンスは出せると思うんですよ。

天野 あと、ただ聴くんじゃなくて、「どういうところに注目して聴くか」というところがあると思います。最初に出たアフタービートとかいう話も含めて全部。だから、聴くときに、どこに着眼点をおくかは考えておいたほうがいいでしょうね。
 ぼくが十代のときにはまず気になったのは、ドラムとベースなんですよ、どんなやつを聴いても。メロディはどうでもいいといたらアレですけど、ビートルズを聴いてもメロディを覚えられなかった人なんですよ、ぼくは。ベースラインとコードとリズム、そっちはかり聞いていた。たぶんノリというのはそっちが大事だと思うんですよ、最初は。
 ——ありがとうございます。

注6

(Original)

 (Jazzy)

注7

「ノリ」の周辺と、知っておきたいこと

真島俊夫

対談のあと、真島さんが「ノリ」について、周辺知識も含めて補足しておきましょう」とご寄稿くださいました。こちらも含めてごらんください。

■ビートはノリを呼びます

そもそも「ノリ」という言い方は、主にリズムに対して言われる。では「リズム」とは何だ？ まずこの問題を考えてみよう。

リズム（律動）とは、基本的には経過し続ける時間を一定の長さで区切ることだ。音楽の場合、その区切りの「印」というか、「打点」を音で表す。この打点を「ビート」あるいは「パルス」と呼ぶが、ジャズ・ポップスの世界では「ビート」と呼ぶのが一般的なので、ここではビートに統一しよう。

人間の習性として、同じ時間的間隔で聞こえてくるビートを聞き続けると次第に興奮して快感を覚えるというものがある。これはもちろん、身体的、肉体的、あるいは感情の中でもブリミティブ（原始的）な部分で感知するのであるが、この特性は古来、儀式や宗教的な分野でも大いに利用されてきた。たとえば、仏教ではお経を読むときに木魚で一定のリズムを打ち鳴らすし、アフリカなどの儀式は必ず太鼓類のアンサンブルを伴う。そしてリズムが肉体的に大きく作用すると、人々は自然に身体を動かしてしまい、それは舞踊へと発展していく。つまりノッてくるのだ。

この規則正しいリズムを繰り返すという

ころが大事で、特にノリを大事にするジャズ・ポップスでは変拍子はあまり使わない。身体が自然な動きに合わないのだ。現代音楽の変拍子ばかり振っている指揮者が「むち打ち症」や「ぎっくり腰」になるのもそのせいだろう。

ジャズに3拍子が登場したのは、モダンジャズの時代になっていた1950年代だし、5拍子で有名な（テイク・ファイブ）も変拍子としては比較的単純な3+2のバターンを繰り返すのだが珍しい例だ。あと7+8拍子（2+2+13）や11+8拍子（タキトタキタキタキトタとカウントする）という例もあるが、これらを好んで演奏するジャズプレイヤーはあまりいない。ほとんどのジャズ・ポップスは2拍子か4拍子だし、ラテンは基本的に2拍子だ。

これらのビートを強調した音楽がジャズ・ポップスだと考えてよいが、そのビートを強く出すには、発音時のアタックが重要になる。たとえば座布団を手で叩いてみよう。ポソツという音で、音のアタックが明瞭でなく、連打してもリズムはあまり感じられない。ではちょっと行儀が悪いが、グラスが茶碗を箸かフォークで叩いてみよう。カチンという輪郭が明瞭な音が出る。こういう音ガリズムを出すのには向いている。

■ノリをよむリズムのポイント

さて、もう一つの実験だが、トライアングルを叩いてみよう。チーンという余韻のある音が出る。連打するとチーンチーンチーンとなり、発音点ははっきり聞こえるのだがリズムはあまり感じられない。では、打った後に手で押さえて余韻を止めてみよう。チートツのよう聞こえるはずだ。それを一定のテンポで繰り返すとチートツ、チートツ、チートツ、チートツとなつて、どうだろう、リズムが感じられないだろうか。余韻を止めるタイミングを変えていくと、とても気持ちのよいリズムになるところが発見できる。それを繰り返していると思わずノッてくると思う。これがノリの基本で、管楽器でも同じだ。

以上から、ノリをよくする方法をまとめると次の3点になる。

- 1 基本のビートを正確に刻む
- 2 発音は鋭いアタックで
- 3 発音だけではなく音を止める位置も鋭くする。つまり音の長さを正確に揃えて、スバツと切る

これらを意識して実践するだけで、ずいぶんノリがよくなるはずだ。

さて、心地よいリズムの音楽を聞いていると、思わず「イェーイ！」という声が出てしまふという経験をした人は少なくないと思うが、これは明らかに肉体的な反応であつて、理性で考えて発した言葉ではない。熱い鍋などに触つてしまつて思わず「アツチエー！」と叫んでしまふのと一緒だ。「この鍋はすく熱いな」と考えてから「アツチエー！」と叫ぶ人はいない。

リズムは、これほどまでに本能に近い部分に作用するので、音楽の三大要素と言われる「メロディ」「ハーモニー」「リズム」の中でも特別な力を持っていると考えられる。18世紀から20世紀初めにかけて、ヨーロッパを中心に発展したクラシック音楽では、もっと感情や理性的な部分に作用するメロディやハーモニー、そして構成美などを重視して発展し続けた。しかし、アフリカでは長い間リズムが発展し続け、やがてアメリカや南米に渡り、ジャズやラテン音楽としてインターナショナルな音楽に発展した。

ジャズやラテンのリズムは、ほとんど全部アフリカ音楽から来ているということ覚えておいてほしい。

■各ジャンルの基礎知識

このような感覚を勉強するには、実際にその音楽を実際に聞くのがいちばんだ。関西弁を聞いたことのない人が、活字の関西弁を読んで決して関西弁には聞こえないのと一緒で、楽譜は音楽を伝えるための活字であるから、それをただ読んだのでは音楽にはならない。音楽を表記伝達する手段としての楽譜は、クラシック音楽では相当のレベルにあると思うが、ジャズ・ポップスそしてラテン音楽では、楽譜では伝えられないことがとても多い。楽譜は一応の「ガイド」だと思つた方がよい。

一般にポップスと呼ばれる音楽、特に吹奏楽で取り上げられるものは、大きく分類すると「ジャズ」「ラテン」「ロック」となるが、それぞれにもっと細かな分類がある。

「ジャズ」は、初期の「ニューオーリンズジャズ」（白人が演奏するとデキシランドジャズと呼ばれる）から「スイングジャズ」、バップからモードジャズまで含めてのモダンジャズ、その間にあつた「中間派」と呼ばれるスタイルがあり、クラシックの現代音楽に相当する「アバンギャルドジャズ」もある。

「ラテン」は、サンバやボサノバに代表される「ブラジリアンラテン」と、マンボやチャチャ、ルンバに代表される「キューバンラテン」に大別される。

「ロック」はいわゆる8ビートや16ビートなど、今やワールドワイドなポピュラー音楽の主流であるから、その多様性は説明しきれないが、大きく分けると黒人系と白人系があり、それぞれノリが違う。それにわれわれ黄色人種系も加わるからややつかいだ。もっともこれはジャズにも言えることで、どちらかと言えば白人系はタテにノル感じが強い、黒人系はヨコにノル感じが強い。抽象的な説明で申しわけないが、白人と黒人の歩き方を注意深く観察するとその違いがわかると思ふ。

こうすればノリが出せる！ パーカッション編

今回のメニューは

白石啓太（パーカッションニスト）

パーカッションの、ノリ・乗り・糊の海を突きまわす！！

パーカッション（ドラムも含めます）のノリを出すためには、どうすればいいのだろう？ 様々なシーンでよく質問されるひとつです。

これを文章にするには、とても難しいというか、ツライというか、とにかくたいへんなことなのです。ですから、これを読んだ後は、とにかく身体を動かし、楽器を演奏して実践してみてください。そして、みなさんもご存じのように、音楽にはたくさんのジャンルがあります。今回はポップス（ジャズやラテンも含む）を中心に、楽器の奏法などを交えながら解説してみようと思っています。

では、ノリを出すにはどうしたらいいの？ それは、ビートにのることです。ここでもノリが出てきましたが、しかしここでいうノリはパーカッションだけではなく、演奏者全体が感じなければいけないことなのです。つまり、「いま演奏しているのは4ビート？ 8ビート？ 16ビート？ サンバ？ ……はまたまた演歌なの？」そんなのです。まずは自分がどういうリズムで演奏しているのかを理解し、身体で感じるリズムのポイント（その80%くらいがベースとキックにあります）をどこにするかということが大切になってきます。そのためには、3つのビートを覚えてください。

■オンビート、バックビート、そしてオフビート

譜例1をメトロノームに合わせて、手拍子をしてみてください。あれっ、譜例2になっていませんか？ 正解は譜例3ですよ。そうですね、4-4の場合、特に指定がなければ、強弱、中強、弱でした。はい、これが演奏しているビートを理解するということなのです。そして、今叩いていた部分を**オンビート**と呼びます。

いっぽうポップスでは、譜例4のように2拍目と4拍目にアクセントがくることが多いのですが、特にこの部分のことを**バックビート**（**アフタービート**）と呼びます。

それでは、ノリをよくするためのトレーニングに入っていきます。譜例5の第1間、左右交互の足踏みで、第3間は手拍子で、メトロノームや自分の好きな曲に合わせてやってみてください。実際に歩いて、踊るようにしてみてもいいですよ。これはそんなに難しくなかったと思います。

本番はここからです。譜例6、いわゆるオンビートの裏ですね。これを**オフビート**と呼びますが、これを感じないで演奏している人がとても多いのです。オフビートを正確に感じ、演奏できれば、みなさんのリズム感、そ

してノリは素晴らしいものになるはず。メトロノーム記号を見て驚いたり、笑ったりしないでくださいね。地道に練習をすれば誰でもできるようになります。

ようになります。それでは、楽器別にノリを研究していきましょう。

■ドラムスのライドとハットの4と8のアペリディフ

ドラムスのノリについて書いてしまうと、それだけでページが足りなくなってしまうの

で、今回はライドシンバルとハイハットシンバルについて、調理をしていきましょう。

譜例8は、シンバルレガートといわれる4ビートスタイルのリズムですが、この通りに演奏すれば何も問題はありません。スローテンポのときは三連符を正確に感じて演奏できますよね。ところが、ミディアム・フアストテンポになると、「はねる」というイメージが強くなるのか、**譜例9**のように演奏する人が多くなります。「三連符ではねるのと十六分ではねると、同じようにはねているのだからそんなに違わないでしょう?」と言う人がいますが、それが全く違うのです。そして、その微妙な差が「ノリ」なのです。この微妙な差を、最初は頭で理解し、少しずつ自然に表現できるようにすることが、ノリがよいということにつながっていきます。

それでは、同じリズムをハイハットシンバルで演奏するとどうなるのでしょうか? **譜例10**のように書かれている場合が多いのですが、実は**譜例11**のように演奏するとリズムがドライブしていきます。歌うと「チーチッチ」ではなく「チーチッチー」のようになります。

そうそう忘れていましたが、リズムを歌うということもノリをよくする手段のひとつです。では、8ビートではどうなるのでしょうか。**譜例12**が一般的なかたちですが、**譜例13**のように、1拍目と3拍目のオンビートに、少しアクセントをつけるだけでノリが変わってきますね。

■タンボリンとシェイカーのカフカフ・ジャアジャア

2つともサンバで使われる楽器で、細かいパッセージを演奏することが多い楽器です。この細かい音符がたくさん鳴っているリズムなので、サンバを16ビートと想っている人がとても多いのですが、実はサンバは2ビートなのです。そう、マーチや日本民謡も2ビートですよ。

譜例14はスルドの基本ビートです。音のイメージは「ドゥツ・ドーン、ドゥツ・ドーン」という感じで、このビートにのってそれぞれの楽器のノリを出せるようになればいいということです。

譜例15はタンボリンのパターンですが、歌ってみると「カンカンカカンカカンカカンカカン」、これを「カフカフカフカフカフカフカフカフ」に変えて歌いながら演奏すると叩き方が少しソフトになるはずですよ。そして「フ」のところ、楽器を持っている方の親指や人差指でミュートをしてみてください。それは、スルドと一緒ですね!

シェイカーですが、基本は**譜例16**のようになります。アクセントがついていますが、シェイカーでアクセントを出すのは至難の業です。えっ、「アクセント以外の音を弱くすればいいのでは?」そう、鋭いですね。アクセントがついている音は、**図1**のように中の粒々をシェイカーの壁にひとつのかたまりになるように「チツ」とか「チャツ」と聞こえるように当て、それ以外の音は**図2**のようにシェイカーの下の曲面を粒々が「ジャアジャア」と転がる感じで演奏します。

それでは、お約束の3人でいかがですか? うまくできていれば演奏している人も聞いている人も、きっと気分はイバネマ海岸ですね。

譜例8 

譜例9 

譜例10 

譜例11 

譜例12 

譜例13 

譜例14 

スルド

譜例15 

タンボリン

譜例16 

シェイカー

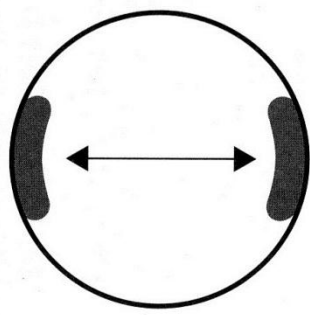


図1

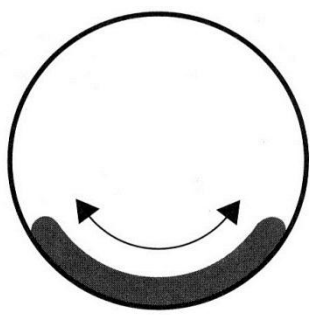


図2

パーカッションのノリについて大まかに解説してきましたが、タンバリン、トライアングル、ボンゴ、コンガ……、まだまだ書いていない楽器がたくさんあります。それぞれの楽器にそれぞれの奏法があり、それぞれのノリ方があるのですが、とにかく皆さんの音楽を聴き、どういう音色を出しているのかを聞き分けてください。そして、フレーズとフレーズの間、ブレスの感じを感覚で体得してみてください。

最後は長嶋茂雄さんようになってしまいました。最後に、ノリは理論だけではなく、センスに頼る部分もたくさんあります。今回の文章がみなさんのセンスを少しでも磨くことに役立ちましたら幸いです。

それでは、今度どこかでお会いしたときには、ノリ・乗り・糊と一緒に演奏しましょうね。

こうすればノリが出せる！

管楽器編

はやすいだがあー流

林田和之（サククス奏者）

「リズム感」と「テンポ感」3段階マスター法

図3

みなさん、こんにちは!! ほとんどの人はコンクールも一段落し、これからは文化祭や定期演奏会など、ポップスの演奏機会が増えるのではないかと思います。最近ではジャズの名曲から、流行のJポップや映画音楽、はたまた懐かしのTV主題歌まで、多彩なジャンルの楽譜が出版されているので選択肢は充分、あとは演奏の中身ですが、「なんか違う……」ってことはありませんか？ そこで、ポップスの「ノリ」を出し、かつよく聴かせるために、お手伝いできればと思います。

まず、ひと口にポップスといっても、いろいろなジャンルがあります。学校の吹奏楽部で取り上げるようなレパートリーだと、

- ・ビッグバンドジャズ（《シング・シング・シング》《イン・ザ・ムード》など）
- ・洋楽ポピュラー（ビートルズ、カーペンターズなど）
- ・ロック、ファンク系（ステイビー・ワンダー、マイケル・ジャクソン、Jポップなど）
- ・フュージョン（《宝島》《オーメンズ・オブ・ラブ》など）
- ・ラテン系（《マンボNo.5》《イパネマの娘》《ブラジル》など）

などがお約束でしょうか？ まずはそれぞれに共通するポイントから進めていきましょう！

■「ノリ」の入り口、

「リズム感」と「テンポ感」

かつこい演奏に必要なこと。それは単純なのですが、正確なリズムと安定したテンポづくりなのです！ リズムが集合してテンポになるわけなので、指で、舌で、ビートを感じて演奏できるようにしていきましょう。

☆メトロノームで興奮できる？

「正確なビートを感じる」

これはクラシックと共通の話です。みなさんの大半がメトロノームを使っていると思いますが、そこで質問！ メトロノームを止めたときに正確にテンポを感じ、刻めますか？ メトロノームを止めると、あれよあれよと崩壊……、なんてことをしばしば見かけますが、大事なものは「メトロノームに合わせる」のではなく、「メトロノームとテンポを共有する」ことです！ 少し遊んでみましょう。メトロノームを四分音符だけ鳴らし、八分音符（タト・タト・タト・タト）、三連符（タトト・タトト・タトト・タトト）、十六分音符（タコトコ・タコトコ・タコトコ・タコトコ）、スイング（ドウーダ・ドウーダ・ドウーダ・ドウーダ）を口ずさんでみます。これに遊び感覚で1、3拍目に足を踏んだり、2、4拍目に手拍子を入れたり、メトロノームを止めたりついたり、シラブルを変えたり、休憩

を入れたり、等々、アイデアを出しながらたくさんのパターンを作って遊んでみてください！

☆思い出話その1

私の高校時代、毎日このようなリズム練習を昼食後に部員全員でやっていました。これを練習メニューに取り入れてくださった、当時の顧問でジャズドラマーの原先生には今でも頭が上がりません。リズムを感じる喜びがない限り、音楽にはノれないのです！ いまだにメトロノームが鳴るとウキウキしてしまう私、ああ幸せ!!（↑マニアック!）

☆リズムにのろう

クラシックの曲では決められたテンポの中で音楽的なテンポの揺らぎ「アゴギク」があり、音楽の抑揚に沿って少しテンポやリズムが動いてもよい場合があります。しかしポップスでは基本的にベースとリズムがかっちりテンポを作り、メロディが少しテンポよりもたれた感じに演奏します。流れにはしっかりと乗りつつ、その中でゆったりと！

テンポより速く転んでいく「前ノリ」はかつこ悪く聞こえてしまいます。余裕をみせて「後ノリ」をかつこよく聴かせてください！

格言その1 決して急ぐなあわてるな。興奮したときこそ余裕を見せろ！

■「ノリノリ」に聴かせるアーティキュレーションは

「音型」と「シラブル」が命

次はクラシックと決定的に違う「音型」のお話です。クラシックでもポップスでも上手な人は音型づくりがとても上手です！

図2

☆止めちゃえ！ 当てちゃえ！

「タンギング」と「音型」

クラシックとポップスの大きな違いは「音の終わり」です。クラシックでは音の終わりは息で処理を作ります。

図1

- ①息を入れるのをやめてブレスをとる（図1）。
- ②音の終わりに、音量がなくなるまで短い時間でデクレッシェンドをする（図2）。

しかしポップスでのリード楽器は「舌で止める」のが鉄則です！ 結果、音型はシンプルに四角くなります（図3）。裏拍の連続するリズム

ム(シンコペーション)はタイがあっても「つづ舌で止めます(譜例1)。最初はかなり勇気がいりますが、慣れると「気にかっこよくリズムが吹けるようになります!」

止めたあとはどうなるか? 当てるわけです! この「止め」「当てる」が連続の動作になって、音楽が生き生きと推進力を持つわけです!

☆**ホンモノに近づけ! 「ドゥーダー・シラブル」**

「シラブル」とは口の中がどうなっているかを「子音+母音(十子音)」で表したものです。子音は発音やタンギングの有無と種類を表し、母音は音の響きを表します(あくまで表記的なもので、実際の音色は、境界がない中間的なものが無限にあります)。

一般的にクラシックの場合は、子音↓タ行(はつきり系)・ラ行(やわらか系)、母音↓ア(はつきり系)・オ(響く系)・ウ(優しい系)・イ(テンションのかかった音、スラー頭の音色)となりますが、ポップスやジャズのサックスの場合、母音はクラシックと同じですが、子音に「タ行」や「バ行」を使います。濁音を使うことによって色気のある少しずんだ音色に、また「後ノリ」の雰囲気が出やすくなるのです!

☆**一気に大人の雰囲気!**
サックスの「サブトーン奏法」

マウスピースをいつもより浅めにくわえて、口の中に入るリードの面積を小さくします。下あごには梅干し状の筋肉のシワを作ってもよく、口を締めすぎずに、暖かい息を下向けに入れます。その結果、少しバズ・ノイズ(ジリジリとしたリードノイズ)が入り、音に変換されないむだな息のノイズも少し混じります。このようなサブトーン奏法により濁音の子音が作られるわけです。

タンギングは前述の通り、「止め」と「当てる」の原理で、「当てる」と図3のような音型になります。しかしながら、きたなくするのはなく、クラシック同様にいろんなバリエーションができるように心がけましょう!

さて、ひと通り説明ができたので、楽器を使って舌でリズムを作る練習をしましょう。ま

ずは舌で音を止める(譜例2)。シラブルは「ドゥーツ・ドゥーツ」、音は抜かないようにしっかりと張りましょう! アーティキュレーションはテヌート。

次に「止め」たら「当てる」(譜例3)。シラブルは「ドゥーツ・ダー」、アーティキュレーションは「テヌート・テヌートアクセント」。「当てる」の音はつきり聞かせるため母音は「ア」に!

最後に「止め」ないけど次に「当てる」(譜例4)。シラブルは「ドゥー・ダー」、アーティキュレーションは同じく「テヌート・テヌートアクセント」。

さあ! それっぽくなってきたかな?!

格言その2 「音楽的センス」は音型に表れる。とにかく原曲(吹奏楽ではなくオリジナル)から「音型」「シラブル」「リズム」を聞き取り、独特の「なまり」を発見すべし!

☆**思い出話その2**

中学生のとき、初めて演奏したジャズがグレン・ミラーの「イン・ザ・ムード」でした。

オリジナルのレコードを聴くとイントロ口ですでに「スイングってリズムが違う!」「タイの長さが違う!」「なまってる!」と3大驚きでした。では、この話の続きを!

■**いよいよ来ました大きな壁**
「スイング」

ポップスは何となく乗り越えられても、乗り越えにくいのが「スイング」。「ハネる」という言葉にごまかされずどうすれば「スイング」らしくなるのでしょうか?!

☆**何を「はねる」?**

はねたらあかんよ! 音の重み

「スイング」は並んだ八分音符2つを、(八分の)三連符2コと1コに変えて「はねさせる」のですが、このついでに「音型」がはねやすくなっています。シラブルで確認していきましょう!

まず、シラブルな八分音符の連続をスイングで(譜例5)。シラブルは「ドゥーダー・ドゥーダー」。

ドゥーダー・ドゥーダー」となります。アーティキュレーションは「テヌート・アクセント」の連続です(実際の楽譜には何も書いていなくてもこうなります)。アクセントは母音を「ア」にして鳴りをよくします。だめなのは拍頭に処理が入ってしまった「ドゥンダ・ドゥンダ・ドゥンダ・ドゥンダ」、こりゃ台無しです!!

今度は「止め」と「当てる」(譜例6)。シラブルは「ドゥーダーツ!・ドゥーダーツ!」。休符の前は強力に「止め」て母音を「アツ!」「マークつき↑(ここ重要です)、この「止め」は縦アクセントにします。

最後に八分音符連続で裏拍の「止め」(譜例7)。前述の複合パターンでシラブルは「ドゥーダー・ドゥーダーツ!」。アーティキュレーションは「テヌート・アクセント・テヌート・縦アクセント」です。

まだまだヒントを与えたいのですが、これだけではかなりいい感じの演奏になるはず! 何より、オリジナルの録音をたくさん聴いて真似していきましょう!!

譜例1

譜例2

譜例3

譜例4

譜例5

譜例6

譜例7